

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	松井 真雪
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 ロシア語における有声性の対立と対立の弱化：音響と知覚			
論文審査担当者			
主査	准教授	五十嵐 陽介	
審査委員	教授	今田 良信	
審査委員	教授	高永 茂	
審査委員	教授	今林 修	
審査委員	慶應義塾大学言語文化研究所専任講師	川原 繁人	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、全8章からなる。世界の言語の大多数には阻害音に有声音と無声音の対立がある。一方で、有声と無声の音声の実態は言語によって様々であり、またその音韻論的ふるまいも異なる。有声性の対立のある言語の一部では、有声音と無声音の区別が音節末、語末、句末など単位末で消失する現象がある。この現象は final devoicing (FD) と呼ばれるが、FD の実態にも言語差が観察される。ロシア語もまた FD の観察される言語である。</p> <p>第1章では、本研究の動機、目的を述べ、主要な用語を定義し、本研究が取り組む問題を整理している。</p> <p>第2章では、主要な先行研究を再検討し、問題の所在が明確にされる。また次章以降で行われる実験結果に基づいて、第7章で検証される仮説が提案される。</p> <p>第3章では、有声音と無声音の対立の音声の実態を正確に理解することを目的とした音声産出実験を通じて語中母音間における当該音の音響特徴を明らかにする。10名の母語話者が発音した60語から抽出された音響特徴を、線形混合モデルを用いて統計的に分析した結果、狭窄部の声帯振動持続時間だけでなく、直前母音の継続時間、狭窄部の持続時間にも有意な差があることが明らかになる。</p> <p>第4章では、語中母音間の有声音と無声音の対立の知覚特性を明らかにする。雑音によってマスクされた8語を16名の母語話者に聞かせ、その反応から信号検出理論で用いられる統計量 d' を算出し分析する音声知覚実験が行われた。その結果、閉鎖音の有声性が、摩擦音の有声性よりも混同されやすいことが明らかになる。</p> <p>第5章では、FD が検討される。12名の母語話者から収集された語末に阻害音を含む60語の音響量を測定し、混合線形モデルを用いて統計的に分析した。その結果、閉鎖音に関しては直前母音の持続時間に、摩擦音に関しては摩擦部の声帯振動持続時間に、有意な差が観察されることが明らかになる。この実験によって、有声音と無声音の間には、単位末においても微細ではあるが有意な差が存在することが明らかになる。</p> <p>第6章では、前章で明らかにされた微細な音響差を母語話者が知覚できるか否かが検討される。前章で得られた音声を16名の母語話者に聞かせ、混合ロジットモデルを用いてその反応を統計的に分析した結果、単位末における有声音と無声音を母語話者は統計的に有意な確率で弁別していることが明らかになる。</p> <p>第7章では、すべての実験結果を整理したうえで、第2章で提案した仮説が検証される。具体的には、ロシア語の阻害音の基底表示、表層表示にどのような音韻素性が指定されているかが検討される。</p>			

第8章では、本論文で得られた知見の要約が行われる。

本研究と類似の研究課題は、他言語を対象としてこれまでも取り組まれてきたが、ロシア語を対象とした研究は十分ではなかった。本研究はその規模と手法上の厳密性において極めて高いレベルにある。得られた結果には新しい発見（特に第5-6章）が含まれており、今後の研究の展開と深化が大いに期待される。実験結果にはより深い解釈の余地が残されており、それが音韻理論にどのような示唆を与えるかは将来の課題となるが、ロシア語の阻害音の有声性の対立の産出と知覚の特性を包括的かつ実証的に解明した論考として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があると認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。